

## ファニー・ヘンゼルの作品出版 出版を妨げていた要因とその障害の克服

米澤 孝子

ロマン派の作曲家フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディ（1809－1847）の5歳年長の姉ファニー・ヘンゼル（旧姓 メンデルスゾーン・バルトルディ）（1805－1847）が500曲余りの作品を残した作曲家であったことは音楽史上長らく知られてこなかった。それは上流市民階級の生れである彼女が、「女性は家庭に」という当時のジェンダー規範に不満を持ちながらも従順に従ったからであったといわれている。彼女の演奏と作品の発表の場は自らが運営する音楽サロン「日曜音楽会」に限られ、作品の出版は父と彼女の作品の価値を一番理解しながらも家長としての父の考えに同意する弟フェリクスによって禁じられていた。

1846年41歳にして彼女は弟の同意を得ずに作品の出版を決意する。19世紀前半の女性の置かれている立場を考えれば、「女性は家庭に」という社会常識を破って外の社会での活動を行うことを決意するには、これだけの年月が必要だったかもしれない。しかし彼女の決意を遅らせていたものは社会的な問題よりも、彼女自身の内にある家族に対する自制であったと考える。外からの束縛と共に、この彼女自らが規制している気持ちを解放し公の世界へ出ていく勇気を持つに際して、彼女を囲む友人知人たちとの関係が大きな力となったが、特に二人の若い男性の存在が大きく関係していると考えられる。イタリア旅行中にローマで親交を深めたフランスの作曲家シャルル・グノー（1818－1893）と1846年ごろヘンゼル家と親しく付き合っていた当時外交官の卵であったロバート・フォン・コイデル（1824－1903）である。本稿では彼女の出版を妨げていた要因とその障害を克服して出版を決意する際に、この二人の男性が彼女に与えた影響を探る。

## 1. アブラハム・メンデルスゾーン・バルトルディ家

啓蒙主義を代表する著名な哲学者モーゼス・メンデルスゾーン(1729-1786)の次男に生まれ、兄ヨーゼフ・メンデルスゾーン(1770-1848)と共に後のメンデルスゾーン財閥の基礎を築いた銀行家アブラハム・メンデルスゾーン・バルトルディ(1776-1835)<sup>1</sup>は、プロテスタントに改宗したユダヤ人であったが、当時のキリスト教社会の風潮とは異なって4人の子供たちに男女の別なく同等の教育を授けた。なかでも長女ファニーと長男フェリックスの並みはずれた音楽的才能を早くに見抜き、著名な音楽家による高度な音楽教育を施した。彼らの才能の発達は父アブラハムを非常に喜ばせたが、1820年7月パリからファニーに宛てた手紙から分かるように、息子フェリックスに対して将来音楽家としての道を歩むことを期待する一方で、娘ファニーに対しては、音楽は教養の一部とするだけで女性としての本分である良き家庭婦人になることを望んでいた。

お前が最近の手紙の中で、フェリックスとの関係におけるお前の音楽活動について書いてきたことは、しっかりと考えられ、きちんと述べられていた。音楽は彼にとってはひょっとすると仕事になるだろう。しかしお前にとっては常に飾りでしかなく、決してお前の存在や行動の基盤にすることは出来ないし、するべきではない。<sup>2</sup>

アブラハムは1821年、息子フェリックスと娘ファニーの作品の発表と聴衆の前での演奏の場として、プロの演奏家を雇って自宅で「日曜音楽会 Sonntagsmusiken」を始める。それは隔週の日曜日の昼間、個人的に招待された客を聴衆として開催され、アブラハムの妻であり子どもたちの母親であるレア・メンデルスゾーン・バルトルディによって「日曜稽古」<sup>3</sup>と呼ばれたような私的な集まりであり、当時いくつも存在した音楽サロンのような性格を持つものではなかった。フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディの12歳の誕生日に、彼の最初のジングシュピール『兵士の恋 (Soldatenliebschaft)』が宮廷楽団の音楽家たちによって初演されたのをはじめとして、彼の初期の作品の初演はほとんどここで行われている。<sup>4</sup> 引っ越しやフェリックスのヨーロ

ッパ各地への教養旅行のため中断されながら続けられたが、フェリックスによる J・S・バッハの『マタイ受難曲』の復活公演が行われた 1829 年 3 月ころには、完全に「日曜音楽会」は開かれることがなくなった。公の演奏と作品発表の場を広げていく弟に対して、ファニーの発表の機会はこの私的な「日曜音楽会」に留まっていたが、年々演奏や作曲活動に熱心になっていくファニーの 23 歳の誕生日に、アブラハムは彼女の本来の役割について戒めている。

そしてもっと真剣に熱心におまえの本来の天職であり、若い女性の唯一の天職である一家の主婦になるために頑張らなければならない。真の儉約に努めることは真の寛大さをもたらす。お金を無駄に使う者は守銭奴か詐欺師になるだろう。女性の天職は最も厳しいものである。女性たちの重要な義務とは、留まることのない細々とした仕事をこなすことであり、一滴一滴の雨が砂に吸い込まれて消えてしまわないように、それを受けとめて川へと導き、豊かさと繁栄を広めることであり、天の恵みが得られるように、一瞬一瞬に絶えず目を配ることである。そしてそうしたことのためにお前が思いつくであろうすべてのことが女性たちの重要な義務なのだ。<sup>5</sup>

社会一般に良妻賢母が女性の誉れとされる当時、ユダヤ一族のメンデルスゾーン・バルトルディ家がドイツ人社会でステータスを保つためにも、娘を最高の婦人に育てたいというアブラハムの気持ちはよく理解できる。そしてこの家族において家長であるアブラハムの父権は絶対であった。公の世界での活動が許されないことへの不満を覚えながらも、ファニーは父親に従う。

## 2. ファニー・ヘンゼルによる「日曜音楽会」の再開

1829 年 10 月に宮廷画家ヴィルヘルム・ヘンゼル（1794－1861）と結婚し、1830 年 6 月に息子セバスチャン・ヘンゼル（1830－1898）の母となったファニーは、「日曜音楽会」の再開の計画を、1831 年 2 月に、ローマに滞在中の弟フェリックスに伝えている。<sup>6</sup>実際にいつ始まったかは定かではないが、1831 年 10 月 4 日の日記に「私の『日曜音楽会』はとてもうまくいっている。そしてそのことが私はとてもうれ

しい」<sup>7</sup>という記述があることから、1831年の春から秋にかけて始められたと考えられる。結婚後ファニーは、ヘンゼルとライプツィヒ通り三番地のメンデルスゾーン・バルトルディ家の館の一部に新居を構える。その広大な館の庭の音楽ホールで、彼女の企画運営によって再開された「日曜音楽会」は、アブラハムが始めた当初のものとは性格を異にし、良質の音楽をゲストに提供する「音楽サロン」であった。歌曲、器楽独奏や室内楽の他に、演奏レベルの高いアマチュアを集めた自前の合唱団とプロの音楽家の共演でオペラやオラトリオの上演も行っている。公の活動を禁止されているファニーにとって、聴衆は招待されたゲストで、個々の演奏や作品が音楽社会の公的な評価の対象にならなくても、唯一の演奏の場であり、彼女自身の作品の発表の場であった。

王立歌劇場と1791年に創立された合唱団体ベルリンジングアカデミー（Sing-Akademie zu Berlin 1827年には自前のホールを持つ）を持ち、多くの音楽を愛好する教養市民が集まっている当時のヨーロッパの音楽の中心地であったベルリンで、<sup>8</sup>このサロンは年々発展をつづけ、その最盛期の1830年代後半には300人を超す聴衆が訪れた。<sup>9</sup>気候の良い季節は庭のガーデンホールで、寒い季節は母屋の音楽室とそれに続く部屋を開放して、夏休みや家族の行事による休止をはさみながら、ファニーの亡くなる1847年の4月まで続けられる。

### 3. イタリア旅行

ファニーが幼いころから憧れていたイタリアへの旅行が、やっと実現したのは1839年の秋であった。約7か月のローマ滞在は様々な面で彼女の人生に大きな影響を与えるが、特に「フランスアカデミー」に留学中のフランス人芸術家たちと接触する機会を得たこと、なかでも作曲家のシャルル・グノーと親交を持ったことが大きい。ベルリンでの束縛の多い生活から解放されて、彼らと共に彼女は次第に自由で明るく奔放な生活を楽しむようになる。当時グノーは21歳、パリ音楽院を卒業してローマへ来たばかりであった。当時のヨーロッパ音楽の中心地であったドイツから来たファニーがグノーに与えた影響は非常に大きく、彼はファニーの暗譜による演奏で、J・S・バッハ、ベートーベ

ンそしてメンデルスゾーンなど同時代のドイツの作曲家の作品を初めて聞いた。ファニーはこの若さあふれるグノーについて日記の中で述べている。「つまりグノーはものすごく活気に満ちていて、そしていつもどんなに私が彼に影響を与えているか、そして彼が私たちのそばに居られてどんなに幸せかを、私に述べる言葉が見つからないのです。

(…) グノーは超ロマンチストで情熱的、ドイツ音楽について知ることとは彼にとって家に爆弾が落ちるようなもので、大きな障害を引き起こすかもしれません」<sup>10</sup>後にグノーは、彼の『回想録 *Mémoires d'un artiste* (1896)』で次のように告白している。

その同じ冬、私は幸運にもメンデルスゾーンの姉であるファニー・ヘンゼルと知り合いました。マダム・ヘンゼルは比類なき音楽家で天才的なピアニスト、才気あふれる婦人です。彼女は小柄で華奢ですが、その深いまなざしの情熱的な輝きは並外れたエネルギーをたたえています。作曲家として彼女は類まれなる能力を授けられており、そのすばらしい才能と驚くべき記憶力のおかげで、私はたくさんのドイツ音楽の名作を聴きました。それらは当時私が全く知らなかった作品で、予想したことのない世界からの純粋な啓示のように感じました。<sup>11</sup>

ローマでファニーと知り合うことによってドイツ音楽のみならずドイツ文化に関心を持ったグノーは、1843年春にベルリンのヘンゼル家を訪ねたときには、ドイツ語をマスターしており、ドイツ語のテキストと一緒に読めることに、ファニーは非常に感動している。<sup>12</sup>この時期ファニーは、ゲーテの『ファウスト』第二部の一場面を題材としたカンタータを作曲していた。この作品がグノーとの話題に上ったであろうことは間違いなく、このことが彼の後のオペラ『ファウスト』の成功に大きく関係していると考えられる。

ローマでファニーは家族の目を気にせずコンサートをして作曲をする自由、そして何よりも彼女の演奏や作品を正当に評価してくれる聴衆を得た。彼女のローマ滞在中の喜びと感動はすべてこの地で彼女が作曲家としてピアニストとして評価される経験をしたことによる。最初著名な画家ヴィルヘルム・ヘンゼルの妻としてだけの存在であった彼女は、当地の偉大な芸術作品から受けた感動や新しい友人関係によ

って、自分の創作本能が活気づくのを感じる。「今、たくさん書いています。正当な評価以上に私を駆り立てるものは何にもありません。」<sup>13</sup>というファニーの言葉を、ローマ滞在中に書かれた多くの作品が現存することが証明している。外部の評価が彼女のなかに作曲家としての自覚を芽生えさせ、創作意欲を呼び覚ましたと思われる。

1840年9月にヘンゼル一家はベルリンへ帰宅する。ローマでの刺激的な生活に比べてベルリンでの生活は窮屈なものであったが、イタリアでの経験を糧に創作活動と「日曜音楽会」の運営に力を注ぐ。ファニー・ヘンゼルの「日曜音楽会」の具体的な記録は残されていないが、日記や知人たちの手紙を資料として各年の開催日やプログラムを探り出し、まとめたハンス・ギュンター・クラインの著書<sup>14</sup>によれば、急病の妹レベッカの看病にフィレンツェに行かねばならなかった1845年を除いて、帰国後の1841年から1846年の「日曜音楽会」のプログラムは非常に充実している。

## 4. 作品の出版

### 4-1. 弟フェリックスの反対

ファニーの公の音楽活動を厳しく禁じていた父アブラハムが1835年に亡くなった後、彼女のプロの世界への道を阻んでいた障害が無くなったかのように思われたが、父の代わりに彼女の前に立ちはだかったのは、父親と全く変わらぬ女性観を持つ弟であった。出版に賛成していた母レアが息子フェリックスに送った、ファニーの出版に協力を求める手紙の返信に彼の態度がはっきりと示されている。

お母さんはお手紙でファニーの新しい作品について書かれ、私に彼女にそれらを出版するように勧めるべきだとおっしゃっています。お母さんは私に彼女の新しい作品を褒めています。それは全く必要のないことです。私はそれらを心から期待していますし、それらがすばらしく優れていると評価しています。(…)しかし彼女に何かを出版することを勧める事は出来ません。なぜならそれは私の価値観と信念に反するからです。私たちはそれについて以前から何度も話してきました。そして私は今もなお同じ考えです—私は出版を重大なことと考えています(…)そしてファニーは

作曲家を職業とするには、私が知るかぎり、意欲も職業意識も持っていないし、その上それが正しいように、女性的でありすぎます。彼女はセバスチャンを育て、家政を行い、そしてこの最初の天職が達成された場合以外は、聴衆のことも、音楽の世界のことも、音楽についてでさえも考えられないのです。そんな中で彼女の生活が出版ということによって乱されるだけだろうし、私はそのようなことに特に同調することは出来ません。<sup>15</sup>

自らの作品への姉の助言を非常に尊重し、彼女の作品の価値を十分に評価していたフェリックスは、1827年と1830年にファニーの6つの歌曲を彼の名前で歌曲集の中に入れて出版している。<sup>16</sup>それにもかかわらず頑強に彼女の作曲家としての自立に反対の姿勢をとったのは、当時求められていた女性の本分を全うすることを、彼女に厳しく求めていた父親の意思を尊重し、女性であるファニーがその才能によって成功するだけでなく、悪い評判を伴う場合もある「有名な婦人」になることによって、一族の不名誉になるかもしれない危険を避けることが、父から継いだ家長としての使命だったのかもしれない。しかしこの社会常識を味方にしての反対理由の影には、1838年にノベッコ出版社への手紙でフェリックスが漏らしているように、ライバルとしての姉の存在への恐れもあったと考える。<sup>17</sup>

#### 4-2. 出版の決意

出版に関しては、私は干し草の二つの束の間にいるロバのようです。私は実を言えばどうでもよく、どちらとも決められずにいます。ヘンゼルは出版を望み、そして貴方は反対しているのですもの。他の事なら私はもちろん全面的に夫の希望に従うのですが、この問題については、どうしても貴方の同意を得ることが私にとって一番重要なのです。貴方の同意無しで私はその種のことは何もしたくありません。<sup>18</sup>

ファニーは1846年7月に作品の出版を決意するが、これは出版を決意する十年前の1836年11月にフェリックスに宛てた手紙である。ファニーとフェリックスの関係は、ふつうの姉弟の関係とは異なり、彼

らの音楽的才能によって形成された特別なものであった。二人は幼い頃から音楽の世界で芸術に対する気持ちや考えを互いに分け合い、作曲の際の問題点を理解し合っていた。ファニーは世界へ出て行く弟の作曲の最高の助言者であり、彼のほとんどの作品の創作にかかわってきた。彼女の助言が生かされた弟の作品が演奏されることが、ファニーにとっては公の世界とのつながりであったといえる。そしてフェリックスは公の評価を得られない姉の作品の唯一の批評家であった。

私のために聴衆の代わりをすることはフェリックスにとって容易いはずなのに、私達がほんの少ししか一緒に居られないので、彼は私をほんの少ししか元気づけることが出来ません。というわけで、私の相手をしてくれるのは、私の音楽だけなのです。その一方で、今回の依頼を受けて、私もヘンゼルもすごく嬉しくてあまり眠れません。そして私は、自分が外部からの刺激が著しく無いにもかかわらず音楽をやめないで続けていることが、才能の証と再度自分で解釈しています。<sup>19</sup>

これは 1836 年に作品の依頼をした家族の友人カール・クリンゲマン (1798-1862) に宛てた手紙であるが、外部の刺激がないことへの嘆きと共に、ここから彼女にとって弟フェリックスは、一人で、彼女が得られない聴衆の代わりになり得る存在である、ということが読み取れる。1836 年の時点では、ファニーは彼女の作品の価値を評価できる唯一の音楽家であったフェリックスの同意なしでは、彼女の作品の出版を行うつもりはなかった。

彼女の気持ちに変化が起きるのはイタリア旅行からである。それまでファニーは自分の作品に自信を持っていたが、それを確信させてくれるのはフェリックスの評価だけであった。しかしローマで弟の影から解放されて、作曲家、ピアニストとして自由に音楽をし、それをグノー等若い芸術家たちから正当に評価されたことによって、音楽家としての自覚と自信を持つ。帰国後もグノーとの親交は続き、彼はベルリンのヘンゼル家を訪れている。1843 年 5 月にグノーが 3 週間ベルリンに滞在した時の日記には「彼の存在は私にとってとても活発な音楽的な刺激になりました。というのはまず、すごく沢山演奏したこと、

そして私が彼と二人だけで過ごした長い午後の時間に、彼と音楽についてとても沢山話したからです。」<sup>20</sup>と書かれている。

1846年春頃、ロベルト・フォン・コイデルはヘンゼル家に紹介され、すぐに彼らと過ごさない日はまれにしかない、<sup>21</sup>というほどの最も親しい家族ぐるみの友人の一人になった。のちにビスマルクの側近となるコイデルは当時22歳、外交官の卵でありベルリンで法学を学んでいた。彼は並外れた音楽的才能に恵まれたアマチュアピアニスト<sup>22</sup>でもあり、ファニー・ヘンゼルにこの若いエネルギーに溢れた音楽家が与えた影響は非常に大きかった。1846年5月17日の日記にファニーはコイデルについて書いている。

我々のより親しい仲間がまた少し増えました。(…) 好ましい仲間の一人はロベルト・フォン・コイデルで、彼は非常に音楽に通じています。私がグノーやデュガソー<sup>23</sup>以来二度と出会っていないような、そしておまけにとっても見事にピアノを演奏し、そもそも非常に元気な愛すべき人間です。<sup>24</sup>

そして1846年7月末の日記に彼女が作品の出版を決意した記述があらわれる。

大体において音楽をすることに関して言えば、(…) 昔のグノーのように、コイデルは息をつく間を与えず、絶えず刺激を与えてくれます。彼は私が何か新しいものを書くとき興味津々と見ており、そしてもしどこかに何か欠けていると、それを指摘してくれます。そしてたいていの場合彼が正しいのです。だから私は今や私の作品を出版することも決心しました。ポータ・ウント・ボック社が私に、恐らくまだアマチュアが一人も受けたことがないような出版の申し出をしてくれました。そしてシュレジンガー社の申し出はもっとずっと素晴らしいのです。私はこうしたことが続くだろうと思っ込んでいたわけではなく、私の最高の作品が出版されることを差し当たり喜んでいました。私はとにかく出版を決意したのであります。<sup>25</sup>

この文面から彼女の出版に関してコイデルからかなり強力な勧めと激励があったことが推察できる。そして彼女をこの歳まで自制させて

いたもの、その内面的な要因がフェリックスに作品の出版を知らせる1846年7月9日の手紙で明らかになっている。

(…)だから貴方が嫌がることは最初から解かっていたので、手際は悪いけれど自分で処理することにします。というのは笑っても笑わなくてもいいけれど、14歳の時にお父さんを恐れていたように私は40年間、弟たちに畏怖の念を持ってきたのです。あるいは畏怖は適切な言葉ではなくて、私が愛しているあなた方みんなを私の一生の中で満足させるという願望です。そしてそれがそうならないと前もって分ると、私は幾分不快な感じがするのです。要するに私は出版を始めます。私はボック氏の私の歌曲に対する忠実な求愛を受け、ついに彼の提示してくれる良い条件を飲みました。<sup>26</sup>

ファニーは父親から求められた従順の中に、何よりも愛する父親と弟たちを満足させねばならないという義務、そしてそのためには自らを犠牲にするという義務を負っていた。長年にわたり兄弟を特にフェリックスを傷つけないようにと、ファニーは自らの望みを自制して生活してきたが、しかしその自制の苦しみに勝るような音楽の世界での結びつきの喜びがこの姉弟間には存在した。それ故に彼女は自分の立場に甘んじてきたのであろう。

私はフェリックスが一步一步と進歩していくのをずっと見守ってきました。私は彼の上達に何がしかの貢献をしてきたといえると思います。私はいつも彼にとって音楽上の唯一の助言者でしたし、彼は私の考えを聞くまでは頭に浮かんだものを音符に書こうとしませんでした。私は彼の作品が実際に書かれる前に全部諳んじてしまいました。<sup>27</sup>

このように書いている17歳の頃は、お互いの才能を称賛し合い、二人だけの音楽の世界において一心同体のように暮らしていた。しかし成長し活躍の場が広がったフェリックスと昔のように二人で音楽をする機会が少なくなり、ファニーの中で彼女の音楽のすべてであった、フェリックスの存在価値が幾分希薄になっていたと考えられる。このような彼女にとって昔のフェリックスの代わりのように現れたのが、

若いグノーでありコイデルであった。ローマでのグノーと共に過ごした充実した音楽生活は彼女の創作意欲を呼び覚まし、彼女に音楽家としての自信と自覚を持たせた。そしてコイデルとの音楽生活は彼女を長年の弟に対する自制から解放したと考えられる。彼らはフェリックスに代わって、彼女の作品の価値が出版に十分に値すると評価し、これによって得られた自らの作品への確信が、父アブラハムの死後も一貫して彼女の出版に関して強硬に反対の姿勢を示した弟に、不快な思いをさせることへの恐れを克服したのではないだろうか。

最後に彼女に出版の決意をさせたもう一つの要因である出版のオファーと出版された作品について触れておく。二つの有名な音楽出版社ボーテ・ウント・ボック (Bote und Bock) 社とシュレジンガー (Schlesinger) 社が彼女に歌曲とピアノ曲の出版の申し出をした。ベルリンでのファニーの「日曜音楽会」の評判、そしておそらく弟フェリックスの世界的な名声も念頭に置いての出版の申し出であったであろう。ファニーの最初の出版、Op. 1『ピアノの伴奏による6つの独唱曲』Vol. 1 と Op. 2『ピアノのための4つの歌曲』Vol. 1 はボーテ・ウント・ボック社からであった。1838年ベルリン創業のこの出版社は当時ベルリンの作曲家の作品の出版に力を入れていたが、ファニー・ヘンゼルはこの社にとって初めての女性作曲家である。<sup>28</sup> 作品の評判はよく1847年5月に亡くなるまでの1年足らずの間にこの二社から6冊の曲集が出版された。

7冊目になる Op. 7『ピアノの伴奏による6つの独唱曲』Vol. 2 は死後の1848年に、その後家族によって1850年にブライトコップ・ウント・ヘルテル (Breitkopf und Härtel) 社から、Op. 8 から Op. 10 までの3冊の曲集と Op. 11『ピアノ三重奏 二短調』が出版されたのを最後に、20世紀後半まで音楽史にファニー・ヘンゼルの名は、フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディの姉として記されていただけであった。

## 注

- 1 プロテスタントに改宗した際に名前ユダヤ色を薄めるためにバルトルディの添え名をつけた。

- 2 Hensel, Sebastian: *Die Familie Mendelssohn 1729-1847*, Frankfurt a. M. und Leipzig (Insel Verlag) 1995, S. 124.
- 3 Klein, Hans-Günter: „...mit obligater Nachtigallen- und Fliederblüten begleitung“ *Fanny Hensels Sonntagsmusiken*, Wiesbaden (Dr. Ludwig Reichert Verlag) 2005, S. 11.
- 4 Klein, Hans-Günter: *Das verborgene Band. Felix Mendelssohn Bartholdy und seine Schwester Fanny Hensel*; Ausstellung der Musikabteilung der Staatsbibliothek zu Berlin-Preussischer Kulturbesitz zum 150. Todestag der beiden Geschwister/ Katalog, Wiesbaden (Dr. Ludwig Reichert Verlag) 1997, S. 136.
- 5 Hensel, a.a.O., S. 126.
- 6 Klein: „...mit obligater Nachtigallen- und Fliederblüten-begleitung“ *Fanny Hensels Sonntagsmusiken*, S. 12.
- 7 Hensel, Fanny: *Tagebücher*, Klein, Hans-Günter und Elvers, Rudolf (Hg.), Wiesbaden (Breitkopf & Härtel) 2002, S. 35.
- 8 宮本直美『教養の歴史社会学—ドイツ市民社会と音楽』、岩波書店、2006年、86-88頁。
- 9 Klein: „...mit obligater Nachtigallen-und Fliederblüten-begleitung“ *Fanny Hensels Sonntagsmusiken*, S. 22.
- 10 Weissweiler, Eva (Hg.): *Fanny Mendelssohn. Italienisches Tagebuch*, Frankfurt a. M. (Societät-Verlag) 1983, S. 97.
- 11 Olivie, Antje: *Mendelssohns Schwester Fanny Hensel*, Düsseldorf (Droste Verlag) 1997, S. 122.
- 12 Hensel, Fanny, a.a.O., S. 226.
- 13 Weissweiler, a.a.O., S. 93.
- 14 Klein, Hans-Günter: „...mit obligater Nachtigallen- und Fliederblüten- begleitung“ *Fanny Hensels Sonntagsmusiken*, Wiesbaden (Dr. Ludwig Reichert Verlag) 2005.
- 15 Weissweiler, Eva (Hg.): *Die Musik will gar nicht rutschen ohne Dich. Briefwechsel 1821 bis 1846 Fanny und Felix Mendelssohn*, Berlin (Propyläen Verlag) 1997, S. 260.
- 16 フェリックス・メンデルスゾーン・バルトルディの歌曲集 op.8 (182年) 中の Nr.2『Das Heimweh』、Nr.3『Italien』、Nr.12『Suleika und Hatem』の3曲、Op.9(1830年)中の Nr.7『Sehnsucht』、Nr.10『Verlust』、Nr.12『Die Nonne』の3曲がファニー・ヘンゼルの作品である。
- 17 Klein: *Das verborgene Band. Felix Mendelssohn Bartholdy und seine Schwester Fanny Hensel*, S. 10.
- 18 Weissweiler, Eva (Hg.): *Die Musik will gar nicht rutschen ohne Dich*, S. 238.
- 19 Kleßmann, Eckart: *Die Mendelssohns. Bilder aus einer deutschen*

- Familie*, Frankfurt a. M. und Leipzig, 1993, S. 241f.
- 20 Hensel, Fanny, a.a.O., S. 226.
- 21 Hensel, Sebastian, a.a.O., S. 843.
- 22 作曲家フェルディナンド・ヒラー (Ferdinand Hiller 1811-1885) は 1872 年に作曲した『近代組曲』作品 144 の第 2 番「ポロネーズ風に」をロベルト・フォン・コイデルに献呈している。
- 23 シャルル・デュガソー (Charles Dugasseau 1812-1885)、フランスの画家。ファニーのローマ滞在当時、フランスアカデミーの奨学生。
- 24 Hensel, Fanny, a.a.O., S. 264.
- 25 Ebenda, S. 265.
- 26 Weissweiler, Eva (Hg.): *Die Musik will gar nicht rutschen ohne Dich*, S. 391f.
- 27 Hensel, Sebastian, a.a.O., S. 169.
- 28 Olivie, Antje, a.a.O., S. 162.

#### 参考文献

- Büchter-Römer, Ute: *Fanny Mendelssohn-Hensel*. Reinbek bei Hamburg (Rowohlt Taschenbuch Verlag) 2001.
- Hensel, Fanny: *Tagebücher*, Klein, Hans-Günter und Elvers, Rudolf (Hg.) Wiesbaden (Breitkopf & Härtel) 2002.
- Hensel, Sebastian: *Die Familie Mendelssohn 1729-1847*. Berlin (Verlag von Georg Reimer) 1911.
- Klein, Hans-Günter: *Das verborgene Band. Felix Mendelssohn Bartholdy und seine Schwester Fanny Hensel*; Ausstellung der Musikabteilung der Staatsbibliothek zu Berlin-Preussischer Kulturbesitz zum 150. Todestag der beiden Geschwister/ Katalog, Wiesbaden (Dr. Ludwig Reichert Verlag) 1997.
- Klein, Hans-Günter: „...mit obligater Nachtigallen- und Fliederblütenbegleitung“ *Fanny Hensels Sonntagsmusiken*, Wiesbaden (Dr. Ludwig Reichert Verlag) 2005.
- Kleßmann, Eckart: *Die Mendelssohns. Bilder aus einer deutschen Familie mit zahlreichen Abbildungen*. Frankfurt a. M. und Leipzig (Insel Verlag) 1993.
- Olivie, Antje: *Mendelssohns Schwester Fanny Hensel*. Düsseldorf (Droste Verlag) 1997.
- Weissweiler, Eva (Hg.): *Fanny Mendelssohn. Italienisches Tagebuch*. Frankfurt (Societät-Verlag) 1983.
- Weissweiler, Eva (Hg.): *Die Musik will gar nicht rutschen ohne Dich. Briefwechsel 1821 bis 1846 Fanny und Felix Mendelssohn*. Berlin

(Propyläen Verlag) 1997.

宮本直美『教養の歴史社会学—ドイツ市民社会と音楽』、岩波書店、2006年。